

בְּרֵאשִׁית II



創世記 2 章 15 節

ベレーシート
בְּרֵאשִׁית II 創世記 2 章

神である【主】は人を連れて来て、
エデンの園に置き、そこを耕させ、
また守らせた。

(創世記 2 章 15 章)



創世記 2 章を学ぶ上で大切な視点

ヨハネの福音書 5 章 39 – 40 節

39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証しているものです。

40 それなの、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとしません。

聖書は、わたし（イエシュア）について証している書です。

この事実を決して忘れてはならないと思います。

イエシュアはあらゆるところにおられます。

創世記は、預言的、奥義的で、イエシュアが来て初めて神のみこころの本質を理解出来ます。 神は隠しているのです。

イエシュアという鍵で、聖書を正しく読むことが出来るのです。

パウロもイエシュアという鍵で、

初めて旧約聖書にいのちを持たせることができました。

イエシュアという、よみがえられた初穂によって、

神と人がともに住む家を再創造されることが初めて理解できました。

私たちも、

イエシュアを入れ込みながら聖書を学ぶ者でありたいと思います。

本日も、創世記の一箇所を学びますが、その理解も

伴侶となるみことばとかかわらせることで、立体的になります。

その伴侶を見出させるのが、聖霊です。

今日の学びも聖霊の導きによってどのような意味なのかを尋ね求め

ながら見出したいと思います。聖書は本当に不思議な書物ですね。

イザヤ書 46 章 10 節

わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。

(パラレリズム修辞法)

「終わりのことが初めに書かれている」は、

シナリオライターがいなければ絶対にありえません。

1500 年以上かけて、40 人以上の聖書書記がいますが、

原稿を書かれたシナリオライターは神お一人ですから、

後のことを最初から告げることは可能です。 ですから、

創世記の学びは、最後を学ぶことになります。

旧約聖書を学ぶときも、これから起こることを抑えておけば、

すべてがつながってくると思います。

神様にはご計画があり、望まれることはすべて実現されるのです。

今日のお題

2章 15節

神である【主】は人を連れて来て、エデンの園に置き、

そこを耕させ、また守らせた。

この箇所には四つの新しい語彙があります。

1 連れて来た ^{ラーカハ} לָקַח

2 置いた ^{ヌーアツハ} נָוַח

3 耕す ^{アーヴァド} עָבַד (不定詞で使われています : 耕すため)

4 守る ^{シャーマル} שָׁמַר (ここも不定詞：守るため)

ハーアーダーム エット エローヒーム アドナイ ヴァイツカハ
 אֶת־הָאָדָם אֱלֹהִים יְהוָה וַיִּקַּח
 その人を 神である 主は そして連れて来て
 לָקַח

ウーレシャームラーハ レアーヴダーハ エーデン ヴェガン ヴァヤツニヘーフ
 וַיִּנְתְּהוּ בְּגֵן־עֵדֶן לְעַבְדָּהּ וּלְשָׁמְרָהּ
 かつそこを そこを耕すために エデンの園に そしてそれを置いた
 守らせるために 不定詞+動詞
 不定詞+動詞

ここは二つの文章からできています

最初の文章は「 神は連れて来た 」という文章です

だれを？ 「 その人を ^{ハーアーダーム エット} אֶת־הָאָדָם 」これが一つです

二つ目は「 その人を 」 「 置いた ^{ヌーアツハ} נִתְּחַ

何のために置いたかと言うと 「 耕す ^{アーヴァド} עֲבַד

^ハ (接尾の「ה」は女性名詞の語尾)

また人にその土地を「 守らせる ^{シャーマル} שָׁמַר 」ために

「 人 」を「 置いた ^{ヌーアツハ} נָחַת 」ということです。

やがて人が罪を犯すようになると、その大地はのろわれます。

その大地とは、神が人を通してご自身を表現する場所です。

その大地を「 耕し、守らせる 」ために人を置いたのですが、

やがて罪を犯して、大地がのろわれてしまうとあります。

神である【主】は人を連れて来て、

エデンの園に置きそこを耕させ守らせたとしていますが、

ここで一番重要なのは「 エデンの園に置いた 」ということです。

これが主要な動詞です。「 連れて来てエデンの園に置いた 」

何のために「 そこを耕させるために 」 「 そこを守らせるため

に 」置いたのだということです。 ですから、

^{ヌーアツハ}
「 置いた נָחַת 」が重要語彙となります。

単なる物を「 置いた 」のではありません。

「 その人をエデンの園に置く 」とは・・・

これが、今日のテーマです。一つずつ見て行きましょう。

「 連れて来る 」

エデンの園が設けられたのは、そもそも人を置く ^{シーム} **וְשָׂם** _(無期限) ため、
任命するためでした。(創 2 : 8)

ところが、すでにエデンには天使長 ^{ケルブ} **כַּרְבֻּב** ケルブがいたのです。
3章では、「蛇」として出てきます。

エゼキエル書 28 章 12-15 節

- 12 「人の子よ。ツロの王について哀歌を唱えて、彼に言え。
【神】である主はこう言われる。あなたは全きものの典型であつた。知恵に満ち、美の極みであつた。
- 13 あなたは神の園、エデンにいて、あらゆる宝石に取り込まれていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、縞めのう、碧玉、サファイア、トルコ石、エメラルド。あなたのタンバリンと笛は金で作られ、これらはあなたが創造された日に整えられた。(タンバリンと笛が与えられたサタンは音楽をも用いるよう

です。「ケルビム」の原文は「(単数形) ^{ケルーフ}כְּרֹבִיִם」です。)

14 わたしは、油注がれた守護者ケルビムとしてあなたを任命した

^{ナータン}

נָתַן (置いた)。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を

歩いていた ^{ハーラフ}הָלַךְ。

15 あなたの行いは、あなたが創造された日から、あなたに不正が見出されるまでは、完全だった。

そもそも御使いの存在理由は、神に仕え、創造の冠である人に仕えさせるためです。(ヘブル 1 : 14、詩 37 : 7、詩 91 : 11)

重要なことは、14 節「油注がれた守護者ケルビム」は、全きものの典型で、知恵に満ち、美の極み、神のしもべとして、エデンにいました。人間が置かれる前に・・・。

^{ケルーフ}כְּרֹבִיִם が創造された日に、神の園であるエデンも整えられたとあ

り、^{ケルーフ}כְּרֹבִיִם はあらゆる宝石に取り囲まれていたとあります。

そのエデンの園に、神である【主】は人を連れて来て置かれました。

ケルーフ

初めて、人間に出会って **קָרַב** はどう思ったでしょう。

ケルーフ

聖書には何も記されていませんが、**קָרַב** は、自分にな

尊い使命を与えられた人間を妬んだのではないのでしょうか。

ここに「 妬みの三角構造 」が見えてきます。

「 神とアベルとカイン 」にも、「 妬みの三角構造 」です。

双子のカインとアベル。カインは自分ではなく、神がアベルの献げものだけに目をとめられたことを「 妬み 」アベルを殺します。

ラーカハ

連れて来る **לָקַח** ?

「 取る 取られた 取り出す take 」

初出箇所：創世記 2 章 15 節 ☞ 「 娶る 」の意味

「 連れて来た 」とは「 娶る 」という意味が含まれています。

ここに、神と人が結婚する概念が啓示されているのです。

ハーアダーマー

しかも人は神を表現するために大地 **הָאָדָמָה** を耕し守る務め、

ケルーフ

קָרַב にはない尊い務めが与えられています。

ケルーフ

קָרַב は、

驚いたでしょう。 人間がエデンの園に連れて来られたことで、

ケルブ

כַּרְבֵּב は反応したはずです。

ラーカハ

連れて来る לָקַח は、創世記 2-3 章に 8 回登場します。

ラーカハ

「 妻を娶る לָקַח 」

神がご自分の伴侶として、助け手として、エデンに連れて来たという事です。

創世記 2 章 19 節

神である【主】は、その土地の土で、あらゆる野の獣とあらゆる空

ラーカハ

の鳥を形造って、人のところに連れて来られた לָקַח。

連れて来られた生き物たちの中に、人に相応しいものがあるかどうかを試しています。 ここはいつか学びます。

創世記 2 章 21 節

神である【主】は、深い眠りを人に下された。それで、人は眠っ

た。主は彼のあばら骨の一つを取り^{ラーカハ}לָקַחְתָּ、そのところを肉で
ふさがれた。

神である【主】は、アダムをあばら骨の一つを取って女を造りました。
聖書の「眠っている」は、死と同一です。

死んでいるアダムから、あばら骨の一つとって女を造ることで
男と女には共通したあばら骨（霊）が備わっているのです。

創世記 2 章 22 節

神である【主】は、人から取ったあばら骨を一人の女に造り上げ、

人のところに連れて来られた^{ラーカハ}לָקַחְתָּ。

創世記 3 章 6 節

．．．女はその実を取って^{ラーカハ}לָקַחְתָּ 食べ、．．．

創世記 3 章 19 節

．．．あなたはそこから取られた^{ラーカハ}לָקַחְתָּ のだから。

アダマー

あなたは土のちりだから、土^{אֲדָמָה}に帰るのだ。」

創世記 3 章 22 節

ラーカハ

・ ・ いのちの木からも取って^{אֲכַלְתָּ}食べ、永遠に生きることがない
ようにしよう。」

シャーラハ

エデンの園から^{אֲשַׁרְחֶנְךָ}「追い出す or 遣わす」。

創世記 3 章 23 節

ラーカハ

・ ・ 自分を取り出された^{אֲכַלְתָּ}大地を耕すようにされた。

6 節、22 節を除いて、

すべて神である【主】がなされたこととして使われています。

出エジプト 19 章 4 節

「あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたを

ポー
鷺の翼に乗せて、わたしのもとに連れて来た^{בוא}ことを見た。

「連れて来た」目的は、神である【主】がイスラエルの合意によって「結婚する」ためです。神がイスラエルと結ぶ契約は「結婚」です。イスラエルの民は、神の特別な所有の民となり、神の宝とされました。それは「祭司の王国」となることです。

教会が、花婿の花嫁であるように、

イスラエルが神と結んだ契約は、神の妻となることです。

シナイ山に連れて来られた目的は、「結婚」です。

その関係が損なわれるとき「背信」とか「姦淫」の表現になります。

「鷺の翼に乗せて」

(祭司たちの働きによって)

ここは、比喩的、かつ象徴的な表現です。

事実、イスラエルの民たちは祭司であるモーセとアロンの指導の下にエジプトから脱出し、シナイ山の麓までやってきました。

話をエデンに戻します。

神である【主】が人を連れて来たのは「人をエデンの園に置く」
ことが目的だったのです。

ヌーアツハ
置く **נָחַ**

「休む 安息を与える 憩わせる 安らかにする とどまる」

ヌーアツハ
大地のちりから人を造って、エデンの園に置いた **נָחַ** は、
エデンの園で「休ませる 安息を与える 憩わせる 休ませる
とどまらせる」ためです。ここも預言的です。

ヌーアツハ
なぜなら イエシュアが「置く **נָחַ**」を使っているのです。

マタイ 11 章 29 節

・・あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。

ヌーアツハ
そうすれば、たましいに安らぎ **נָחַ** がきます。

ヌーアツハ
くびきをともにするなら安らかになる **נָחַ** と使っています。

黙示録 21 – 22 章

新しいエルサレムでは、完全な永遠の安息が備えられているという
意味で、初めと終わりが結びついています。その間（創世記 3 章～

ヌーアツハ

黙示録 20 章) は「置く^{ヌーアツハ} **נָוַן**」が閉ざされているのです。

動詞「置く^{ヌーアツハ} **נָוַן**」の名詞「憩い^{メヌーハー} **מְנוּחָה**」

詩篇 23 編 2 節

メヌーハー

主はわたしを緑の牧場に伏させ いこい^{メヌーハー} **מְנוּחָה**のみぎわに伴わ
れます。

ルツ記 1 章 9 節

メヌーハー

・ ・ それぞれの身の落ち着きどころ **מְנוּחָה** を得させるように
(口語訳)

ルツ記 3 章 1 節

マーノーアツハ

娘よ。あなたが幸せになるために、身の落ち着き所 **מְנוּחָה** を私が探
してあげなければなりません。

「 身の落ち着きどころ 」と訳されています。

「 家庭 」と訳す人もいます。

ナオミはルツのために身の落ち着き所をボアズにしようと画策します。 女性にとって、身の落ち着き所は重要です。

メシア王国も、本体である新しいエルサレムも、

神と人がともに住む家「 永遠の身の落ち着き所 」です。

人をエデンの園に連れて来て「 ^{ヌーアツハ}置く **נִתַּן** 」のは神である【主】です。 神と人と住むために結婚して、人の永遠の身の置き所としてエデンに置かれました。

置かれた所を「 ^{アーヴァド}耕し **עֲבַד** 」 「 ^{シャーマル}守る **שָׁמַר** 」のが

人に与えられた尊い務めで、^{ケルーヴ}**כְּרוּב**が妬むほどです。

ですから何としても人の身分を貶めようとしたのでしょう。

その務めとは「 祭司的務め 」と「 王的務め 」です。

「 ^{アーヴァド}耕す **עֲבַד** 」 「 ^{シャーマル}守る **שָׁמַר** 」
(祭司的務め) (王的務め)

祭司的務めは、神の声を聞くことで神を知り、神と交わり、神からのいのちの流れに与る務めで、人にだけ与えられた務めです。

神の声を聞くことで、主を知り、神と交わり、神からのいのちの流れに与る存在であり、備えです。 そのために、王的務め、祭司的務めを支える外側からの力と権威も与えられているということです。

これは二つで一つです。 幕屋でも学びましたが、

幕屋の一番外側にある 60 本の柱、その柱を二方向から紐で張り、杭で打ち付け、しっかりと柱が倒れないように支えています。

柱をしっかりと支える二本の紐と、打ち付ける杭が必要でした。

「二」が「^{エハード}一つ」

- イエシュアが洗礼を受ける時の、バプテスマのヨハネ
- イエシュアがヘロデ王の迫害を免れるためにエジプトに行き、
エジプトからイスラエルの務めを踏み直す時の、マリアとヨセフ
- 幕屋建造には、霊に満たされたベツアルエルとオホリアブ

「二」が「一つ」になるのはとても重要な真理です。

祭司的務めだけでも、王的務めだけでも成り立ちません。

二つで一つです。

最初のアダムに与えられたエデンの園は、祭司的務めと王的務めがありました。それは、イスラエルの幕屋、神殿、教会や御国にも重要な務めになってきます。

●王である祭司は、祭司の務めと王の務めが対になっています。

黙示録 1 章 6 節

・ ・ ご自分の父である神のために、
私たちを王国とし、祭司としてくださった方に ・ ・

と記されています。 創世記の耕すことと守ること、

すなわち祭司的務めと王的務めは、神の家である

「 幕屋 神殿 教会 御国に住む者 」の重要な務めです。

それ故、イエシュアは最初のアダムの失敗、イスラエルの民の失敗を

いずれも踏み直すために「 最後のアダム 」として

真のイスラエルとしてエデンの園を回復するために来られました。

メシア王国はエデンの園が回復した姿です。

これが「 御国の福音 」の内容です。

「 御国の福音 」を伝えることは、とても重要です。

私たちが救われたらいいでは終わりません。

私たちが祭司として、王としての務めを果たしていくこと、

地では、神様を表現する務めに与る福音が「 御国の福音 」です。

教会は、ここに目覚めて戻っていかなければなりません。

自分が救われて自分が祝福されていればいい

という話ではないのです。

もう少し、耕す ^{アーヴァド} אָרַב (旧約 317 回) を深めていきましょう。

創世記 2 章 5 節

・・・また、大地を耕す人もまだいなかった。

否定的なことばで表されています。

「 地にはまだ野の灌木もなく野の草も生えていなかった。

神である【主】が、地の上に雨を降らせていなかったからである。 」

なぜ野に灌木もなく草も生えていないのか。

なぜ地の上に雨を降らせていなかったのか。

それは大地を耕す人、地で神を表現する人が存在しないからです。

大地には、耕す人の存在が重要だとほのめかしています。

アーヴァド
עֲבַד耕す

(創世記 2 章 5 節、15 節、3 章 23 節)

アーヴァド
人がこの土地を「耕す עֲבַד」とは、

罪を犯しても、神から与えられた地上で、神を表す**祭司**の使命は、
とどまることがなく続いていきます。

アーヴァド
「耕す עֲבַד」は神に仕える、神を礼拝すると同義です。

神の声を聞き、神を知り、神と交わり、

神とのいのちの流れに与る務めがこの語彙に含まれています。

そのために、園には木があり、川があります。人がそれを食べたり
飲んだりすることで園の務めを果たすことができるのです。

神は順序だてて、食べるべき木（神のことば）を園に生えさせて、
その地をいのちの水である川の流れ（水：聖霊）で潤しました。

それは人が神のことばを食べ、聖霊に与ることで

務めを果せるようにしてくださったのです。

神である【主】は、神そのものを入れる容器として人を造られました。

ハーアダーマー

その地「^{הַ}^{אֲדָמָה}」で人が祭司として預言するためです。

これは永遠に変わらない人としての務めです。

罪を犯したとしてもこの祭司の務めを果たす流れがあるのです。

シャーマル

「 守り ^{שָׁמַר} 」

なぜ順序が「 守るため 耕すため 」ではなく「 耕し 守る 」

なのでしょう。 ここも重要です。

「 守る：王的務め 」の前に「 祭司の務め 」が優先されるべき

務めだと示しています。神を知らずして王の務めはできません。

イスラエルの最初の王、サウルは王の務めを破棄されました。

それはサウル王が、祭司的務めを蔑ろにしたからです。

サウル王は神から「 アマレクを聖絶せよ 」と命じられていたにも

関わらず、アマレクを聖絶していなかったのです。

「 聖絶する 」と聞くと、私たちは狼狽えてしまい、そんなひどい

事をする神様が分からない、となるかもしれませんが、

アマレクをすべて神の手に献げよ、ということです。

サウル王は、アマレクの中から自分にとって価値のあるものを盗んだのです。彼は聖絶（すべて神に献げる行為）をすることなく価値あるものを自分の所有とし価値のないものを神に献げました。

これは、祭司として在り得ない行為です。

王である前に、祭司的務めがいかに重要であることを示す事例です。

サウル王の後で立てられたダビデ王は、

ただ一つのこと ^{エハード} \aleph を求めた人です。

^{エハード}
 \aleph

この「一つ ^{エハード} \aleph 」は、大切なすべてを含む「一つ ^{エハード} \aleph 」です。

それは、神を求める祭司的務めを大切にしたということです。

ダビデ王は「ただ一つのこと ^{エハード} \aleph 」神を求める祭司的務めを大切に願い求めました。それで、ダビデは全イスラエルを統一してサウルに勝る王となり、そのままソロモンに受け渡されていきます。全イスラエルを統一したダビデが最も大切にしたのは、

神を求める祭司的務めです。それゆえ、王的務めも出来るようにされたのです。これは重要だと思いませんか。

祭司的務めと、王的務めは、神の御子イエシュアが来られて、人を贖い、人を新創造する出来事にも見る事ができます。

「14 のアラカルト」

2022 年 第一回セレブレイト・スッコートで導かれてまとめた「14 のアラカルト」。是非、ご自身の物にして欲しいと思います。

イエシュアが聖霊によって受胎告知され、受肉します。

その霊は人として成長し、ますます強められていきました。

霊がたくましくなっていたのです。

聖霊によってイエシュアが造られ受肉し、その霊は日増しにたくましくなっていたと記されています。

アーヴァー

𐤀𐤍𐤅

望む 好む 願う のゲマトリアが 12 です。

12 は、神様が喜ぶ数です。 12 歳のイエシュアが「神のことば」によって生きていることの証しとして、エルサレムで、当時の律法学者たちと対等にやり取り出来ました。

見ていた民衆の驚きが止まらなかった（驚き続けていた）と記されています。 それは、当時の律法学者が言わない「 御国の福音 」を語ったと思います。そのためイエシュアは来たのですから・・・。

イエシュアのある霊とは「 御国の福音 」です。

聖霊に導かれたシメオンは、抱いた幼子（イエシュア）に救いの全貌を見たのです。

シメオンは、これで安心して死ねると思いました。

これは啓示的なデモンストレーションです。

私たちも、生きているうちに聖霊によって救いの全貌をイエシュアの中に見るならば安心して死ねるのではないですか。

死んだ後、なんとなく天国に行けそうだとは聖書にはありません。

シメオンは、救いの全貌である異邦人の啓示の光とイスラエルの栄光を見たのです。生涯の目的は達成して安心して死ねるのです。

死んで、目が覚めたら「御国」が現実になっています。

これが「 御国の福音 」の骨頂でしょう。

人が目を閉じて（死）目を開けたら天に引き上げられているのです。

イエシュアに出会って、メシア王国に入り、神のご計画の中に巻き込まれていきます。「御国の福音」を証しするような葬儀がなされるとしたら、教会は使命を果たしたことになります。

ただ天国に行くという話でしたら、異教的なものが混ざったパン種が入っています。

パン種を入れて語るならば、天国に行く、で終わります。

これはカソリックが作り出した教えを、引き継いでいるのです。

天国に行けるという漠然とした教えは聖書にはありません。

イエシュアがヨハネから洗礼を授かって 30 歳になった時、私たちとともに最初のアダムを取り込んで、人と一体となって最初の人を終わらせました。

新しい人間を造るため、ヨハネは洗礼の働き手として存在しました。

イエシュアは、誕生の時から聖霊に満たされていました。

しかし、公生涯の働きのために、聖霊がすでに働いているのにも関わらず、洗礼を受けました。なぜでしょう。それは、イエシュアが王的な務めを果たすためです。それで、イエシュアが洗礼を受けた時、天が開けて神の霊が鳩のように降りてきたのです。

神の任職式がイエシュアの洗礼でした。

すでに 12 歳の時、内側では祭司の務めが完成されていました。

18 年後、公に実現するために、王的務めを果たされるのです。

プレーロー
Πλήρω 内側の満たし

ピンプレーミ
πίμπλημι 外側の満たし

このことは、弟子たちにも同様に起こっています。

イエシュアは公生涯の人の務めとして、

受難と十字架の死で最初のアダムを完全に終わらせます。

十字架上で、すべて完了した $\alpha\lambda\psi$ と言いました。

そして三日目に、イエシュアは「いのちを与える霊」となられて

弟子たちの機能不全を起こしていた霊に入り、再生させて

弟子たちの内なる霊を満たされました。その結果、ようやく

弟子たちは「御国の福音」を理解出来たのです。

プレーロー
内なる霊の再生がされて Πλήρω していきます。

王的務めの前に、

40 日間かけて祭司的務めが実現されて回復するのです。

イエシュアは、息を吹きかける度に「 御国の福音 」を教え

40 日間繰り返すことで、弟子たちは完全に「 御国の福音 」を

理解出来ました。その後、昇天して神の右の座に着座されました。

彼らは 10 日間祈っています。冠詞付の祈り「 主の祈り 」です。

「 みこころが天にあるように、地にも成してください 」という

祈りです。そのために私たちの今日必要なことを教えてください、が

日々の糧を与えてください、です。

120 名が祈っていました。

(モーセは 120 歳で死にましたが、目は霞まず、内なる霊は満タン

状態だと死ぬ時の説明がされています。死んだモーセは、イエシュア

を表す器で、死んでよみがえることを 120 歳で証ししています。

ですから、ここの 120 名も死んでよみがえった者たちが示されてい

るのです。その上、ペンテコステで天から強力な風が吹いてきて、

彼らを外側から霊で満たした ^{ピンプレーミ}πίμπλημι のです。

^{ピンプレーミ}πίμπλημι が王的務めを果たすのです。

この二つ、^{プレーロー}Πλήρω と ^{ピンプレーミ}πίμπλημι が揃って

私たちは神のために働くことが出来るのです。

まず内側に「 御国の福音 」をきちんと理解する、

そして伝えていく力が必要です。

それは、多くの軋轢をもたらしますから力が必要なのです。

イエシュアも、神の「 御国の福音 」を伝えられて、教えられています。そのために三年半、神の力が必要だったのです。

イエシュアは昇天される前に、弟子たちにこのように言われました。

ルカの福音書 24 章 46-49 節

46 こう言われた。「次のように書いてあります。『キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中よりよみがえり、

47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に伝えられる。』エルサレムから開始して、

48 あなたがたは、これらのことの証人となります。

49 見よ。わたしは、わたしの父が約束されたものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられる（外側の聖霊の満たし）までは、都にとどまっていなさい。」

使徒の働き 1 章 8 節

しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき（外側の聖霊の満たし）、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに、地の果てまで、わたしの証人となります。」

マルテュース

この証人 $\mu\acute{\alpha}\rho\tau\upsilon\varsigma$ は、殉教者という意味です。

いのちを賭けて、わたしの証人となるような力をあなたがたは受けるという約束です。実際に与えられました。

上からの力を受けて、彼らは「王なる務め」が出来たのです。

上から注がれる聖霊が、さらに満たされることを

ピンプレーミ

$\pi\acute{\iota}\mu\pi\lambda\eta\mu\iota$ で表しています。

これが「聖霊によるバプテスマ」という実です。

「聖霊によるバプテスマ」は、

使徒の働き 1 章 5 節と 11 章 16 節しか使われていません。

使徒の働き 1 章 5 節はユダヤ人たちに対して、11 章は異邦人に対

ピンプレーミ

して、 $\pi\acute{\iota}\mu\pi\lambda\eta\mu\iota$ される聖霊によるバプテスマの箇所です。

ピンプレーミ

ここで、ユダヤ人と異邦人が同じ $\pi\acute{\iota}\mu\pi\lambda\eta\mu\iota$ され、

プレロー
また Πλήρω されて教会が成立するのです。

ペンテコステに教会が成立したのではなく、
復活の日から異邦人が聖霊を受けるまでの期間を通して
教会が成立していきました。

ペンテコステに教会が生まれたという教理は、
聖書で見出すことが出来ません。

キリスト教の教理で聖書を読んでいくと、新しいことを見出せない
のです。

エデンの園では、人は神のことばである「いのちの木」を食べ
聖霊である「いのちの水の川」を飲むことで、耕し守る務めを
果すことが出来たように、イエシュアの弟子たちも
一人一人が聖霊に満たされて、

「王なる祭司」として回復されてきました。

「聖霊を受けよ」と息を吹きかけられて「祭司としての務め」が回復
してから、「王なる務め」も回復されました。

「王なる祭司」の回復です。

今日のまとめ

2章 15節のみを学びました。

この節で大切なことは

神である【主】が人をエデンに連れて来た目的です。

二つあります。

一つは、神と人が結婚してともに安らかに住む、

永遠の住処を得ることです。

住むとは、神を知り、神のことばを聞き、いのちを得ることです。

そしてもう一つの目的は、

人は木を食べ、流れる川の水を飲んで、耕し、守る務めのためです。

換言するなら「祭司としての務め」と「王としての務め」を

果たすということです。

しかし、これはサタンが妬みを引き起こしました。

それ故、神は、アダムに警告しています。

善悪の知識の木から食べてはならない、その木から食べる時

あなたは必ず死ぬ、

これは神が今から何が起こるのか、またサタンが何を思いながら

永遠の園で起きた出来事を見たかを悟って警告しているのです。

これについては 次回に学びたいと思います。

どうして人は妬みを持つのでしょうか。

妬みの正体を人間が解決できるのでしょうか。

道徳倫理で解決できますか。

話し合いで妬みを無くしましょうと解決できますか。

もし、出来るのであればいじめの問題はなくなります。

いじめの深い問題は霊的なもので、人間には解決できません。

それが国の単位、思想の単位で大きくなれば戦争へと発展します。

どうすることも出来ないのです。

まったく解決できないまま、歴史の最後まで持ち越されていきます。

今日は妬みについてのテキストではありませんが、

人間に与えられた尊い務めをケルブは妬んだのです。

御使いは、人に仕えるために造られたものですが、

天使の三分の一はサタンになびいて悪霊として連れて行かれます。

シナリオライターの神はすでに、物語を設定しているのです。

サタンが一番の妬みはイスラエルです。 ですから、

歴史はイスラエルを基軸に流れていきます。

どうしてイスラエルがいつも攻撃され、悪く言われるのか。

最終的に、反キリストはイスラエルの民を無きものにしようと

敵意をむき出しにします。

しかし、神は「 イスラエルの残りの者 」を立ち上がらせて

歴史の最後に持ってきます。それに私たちは連動していきます。

神の歴史を学ぶことで、

敵の動きや、神のご計画を知ることが出来るのです。

人間に与えられた尊い務めにケルブが反応して

人間を騙すことになりましたが、

神は事前に警告しているのです。

私たちがしなくてはならないこと、教会がしなければならないこと

は「 耕し、守る 」ことです。 その務めは、

ヨハネの福音書 20 章、使徒の働き 1-2 章にもあります。

それは、

プレーロー

ピンプレーミー

Πλήρω と πίμπλημι によって回復されていくのです。

では、次回

「 どうして 善悪の知識の実を食べると死ぬのか 」

という話です。

これも伴侶がないと絶対に理解できません

神の語ることばは、そういうものなのです



2023.9.4

アシュレークラス月曜日

創世記 2 章 15 節

空知太栄光キリスト教会

銘形秀則